

せたかむい

古平町役場総務課
842-2181(代)
平成19年6月1日

年表で読む 古平の歴史

[118]

商工業 ⑤

商業

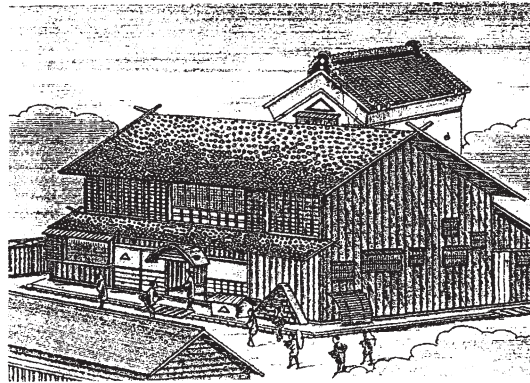
◆ 商工業者の業種別

古平も大正時代の鯨漁は好漁に恵まれ、特に大正九年は明治以来の記録では最高の七万石を漁獲し、町の経済にも大きな波乱はなく、町民の生活も比較的安定し、商業も順調に推移して、大正一〇年の商工業の業種別の店舗は次のようであった。

物品販売業 一五六
金銭貸付業 八

物品貸付業	一・製造業	四
運送業	四・請負業	六
仲立業	二九・宿業	七
料理店	一二・代理店	二
湯屋	二・代書業	四
問屋業	七・大工業	七
飲食店業	二・理髪業	一四
倉庫業	四三・菓子業	一
鍛冶業	六・豆腐業	八
造花業	一・籠業	一
染屋	一・仕立て業	三
下駄業	二・畳屋	一
合羽業	一・綿打ち業	一
提灯業	三・翹業	六
証業	四・ブリキ業	一
でんぷん業	一・表具師	一
桶業	二・牛馬売買業	三

← 後志盛業団会に掲載された
△(ウロコ) 仲谷勇次郎漁場の図
海老川古平郡江村十七番地
仲谷勇次郎



◆ 倉庫業会社の設立

鯨・タラ漁業などの海産物は特定の時期に集中するため、その保管や管理には大きな建物を必要としていた。特に山あいや傾斜地にある沖村・歌来・群来村などでは倉庫を建設する用地が少なく、適当な時期に販売するためには、港湾の近くに運搬し貯蔵して置かなければならない状態であった。

鯨漁などで活況を呈していた古平

郡には倉庫業者が無く、漁業者や海産商は常に不便を感じていた。このような状況から、群来村で鯨漁場を経営していた渡辺宗作は倉庫業を始めることにし、沖村の鯨漁業者と合資により、明治三十三年、資本金三千五百円で渡辺合資倉庫会社を設立し、入船町に二・三八・六平方(約七〇坪)の石蔵二棟を建設した。これは古平郡で初めての会社でもあった。

← 株式会社倉庫による倉庫業を始めた
渡辺宗作商店と石造りの倉庫



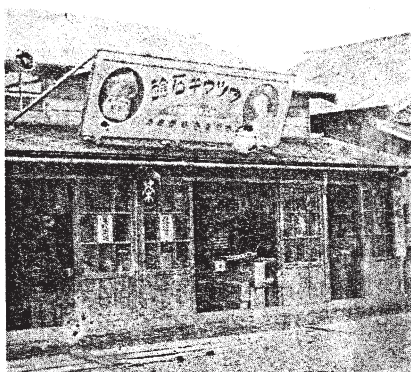
創始者である渡辺宗作は越後国刈羽野村(新潟県刈羽町)の出身で、網に使う綿糸の行商をしながら古平に渡航して来た。そして古平を中心として余市・美国・積丹方面で行商をし、一〇年余りで新地町に店舗を開き、はじめ美国郡で練建網を共同で経営し、のちに群来村で練漁場を経営していた。

← ほぼ同じ位置から見た新地町商店街の風景
上は明治二〇年代 下は大正年代の中頃と思われる



会社は海産物の寄託を受けたほか、寄託品を担保として金銭の貸し付け業務も行なった。合資者は、入船町 渡辺宗作
沖村 大澤吉三郎・米田惣太郎・田岸貞治・須磨定吉・米田末作・田畑勘四郎の七人であった。
明治三六年、金銭貸し付けの業務を停止し、貨物の寄託を受ける業

← 高野孝幸作日記によく出てくる大 鶴間小間物店の前景



務だけとなった。その後、漁業者が各自で倉庫を持つようになり、明治四四年三月会社を解散した。

◆ 劇場の建設

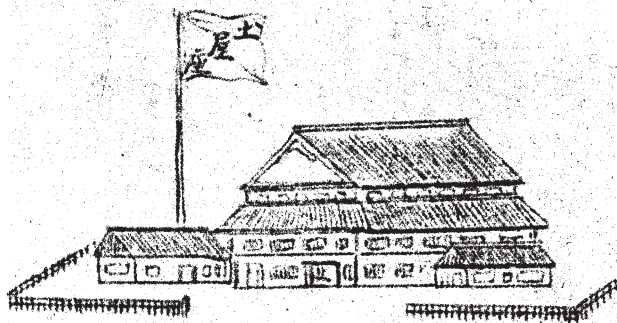
古平での娯楽施設としては、お盆や祭典などのとき町外から来た業者が魚粕干場にムシロ(藁)小屋を建て、相撲や芝居、見世物などの興行をしていた。これらの興業の勧進元となっていたのが北澤金蔵・佐原松五郎・碇善造といったいわば当時の俠客と言われるような人たちであった。

明治三〇年(一八九七)頃、土谷久太郎が新地町に新地座を建て、歌

舞伎・壮士芝居・浪花節などを上演して大いに賑わっていた。

明治三五年、土谷久太郎は浜町にも興業場を建設するため浜町方面の有志を募り、合資会社組織として、浜町二〇二番地に古平共同土谷座を新築し、諸興業や集会の貸席とした。

← 古立市街地図に載っている新地町の土谷座の外観



△ 続く ▽

大正十五年

〜続く

▼四月三日

夜中の二時、三時から人通りがある。浜に出て見たが予想外の大々漁、丸山岬から沖村にかけて、一か統で少なくとも二〇〇石は獲った。多いところは四、五〇〇石、三〇〇石平均としても一万五千石、刺網はケラ掛かりというから七千石、合計二万二千石は固い。㊦、共同は代り杵に詰め、大漁旗を立てて勇ましい。歌棄の△、崎長、△、△、○などは二杵も獲ったという。こんな厚い一帯の群来は何十年振りのことだという。沖の杵船はほとんどが大漁旗を立てている。活動写真を見る以上の見ものである。刺網はどこへ刺してもムラなくケラ掛かり、余市通いの船で出面に来る人の数は三〇〇人を超えるという。波は静かで天気はよい、こんな大漁は町始まって以来のことだ。子供たちが三人で鉢拾いに行き、四毛ヅコも拾って来た。

▼四月四日

古平の大漁は近辺にも響き渡っている。こんな不公平のない大漁

も珍しい。水揚げに対して甲乙つけ難く、建網も刺網もよい。全く福の神というほかない。浜に出て見ると、昨日に引き続いて沖揚げで忙しい。古平中が二日間も続けて沖揚げとは珍しい。四時頃から雪が降り出し吹雪きになる。一面が銀世界に変わる。鉢大漁というのにこの雪空は何としたことか。

▼四月五日

人のうち三人が海に落ちて行方不明とのこと。せつかく大漁だといふのに気の毒なことだ。夜㊦へ部落会の集りで行く。

▼四月六日

今日も朝から雪がチラチラ降り寒いが、海はナギなので沖揚げしているところが何軒かある。店ではスタレ、ツナギツラがよく出る。この大漁でサキリも品切れとのこと。

▼四月十一日

チラチラ雪が降り寒い日だ。今年はずいぶん雪が多いが、周りはどこを見ても鉢だらけである。ツナギツラ、すだれがよく売れる。家でも出面二人頼んで買い鉢の始末をしているが、一人は札幌の人で家の二階に泊める。

▼四月十五日

祝聖会例会、四時半起きたが、もう出面の人達がガヤガヤと通る。町も薄明かりになった。雪空も今日はようやく快晴になる。裏の雪消しをし数の子、白子干しをする。

▼四月十六日

昨夜あたり漁があるかと思っていたがさっぱりだった。鉢漁も七分どおり過ぎたか。このままでも古平は大漁、全般に漁があつたので今年は悔やむ人はいない。第一期の鉢漁獲高(小樽新聞)

古平 三九、二〇〇石

美国 四七、五〇〇石

積丹 四〇、〇〇〇石

高野名幸作さんの日記から 当時の世相を見る

(125)

朝起きて見ると三寸以上も雪が積もつていて、白子を干していたすだれも雪の下になつていて。数の子のコガにも氷が張っている。

時化で沖揚げが出来ないので皆鉢割きをしている。今日だけでサバ割きが二〇数丁も売れた。聞けば昨日の時化で、沖村の近江さんの杵船が発動機船に引かれて港内に入る途中、乗り込んでいた五

▼四月九日

所用で小樽へ行き、一一時半、末広丸で古平に着く。船も人で賑やかだったが、鉢つぶし、粕たき、鉢割きなどで、町中まるで戦場のような忙しさだ。家でも買い鉢をしたので、その鉢割きで大忙しだ。

▼四月一〇日

朝早くから鉢を運ぶ馬車が何

余市 三九、〇〇〇石
岩内 一七、〇〇〇石
増毛 二四、〇〇〇石

▼四月一八日

札幌から来ていた出面が今朝帰った。六日から来て一二日間働いて一六円余り持つて帰る。来年もまた来たいと言つていた。今年は雪が多く地面が乾かないので、干物には皆困っている。

▼四月一九日

学校も去る一日入学式があつて、鯨休みがあつたが今日から授業が始まる。鯨漁も一段落した。また雨で天氣が悪くなり干物には困つた天氣だ。

▼四月二〇日

鯨漁も盛りが過ぎ、樺太方面での漁になつたので出稼ぎの人達が出て行く。富丸、末広丸、古英丸など満船で出港する。一日ごとにさびしくなる。

▼四月二一日

雨が續いて、数の子など乾かずに困つたことだ。昨夜漁があり、△、原田三、四杯、種金一二、三杯獲つたという。

▼四月二三日

この頃一番の天氣になつた。よ

うやくムシロを広げて数の子などを干す。町も鯨場気分が抜けてさびしくなつた。山はまだ真つ白で風も寒い。静かな夜で満天に星が輝いている。

▼四月二四日

寝ていると道路をガヤガヤ人通りがする。聞けば鯨漁があつたとのこと、あちこちで二、一〇杯ぐらいも獲れたとのこと。久し振りで新鮮な鯨を見る。

▼四月二五日

入船町から前浜一帯にかけて二、五杯獲れた、刺網も掛かつたという。熊さん、一〇時頃船でカレ釣りに行って夕方帰つて来たが、一モツ半も釣つて来た。

▼四月二六日

イワシ網の問い合わせがポツポツある。新聞に二六日朝までの全道鯨漁獲高が出た。

古平	四四、〇〇〇石
美国	五〇、〇〇〇石
積丹	四八、〇〇〇石
余市	六二、〇〇〇石
岩内	一八、〇〇〇石
寿都	一二、〇〇〇石
歌葉	八、〇〇〇石
増毛	三三、〇〇〇石

▼五月五日

イワシ網許可船五〇余隻、今日水産組合に集めて漁業法などについて注意があつた。また、漁業者同士でいろいろ協議をしたそうである。

▼五月一三日

新聞によれば樺太も鯨大漁、亜庭湾一帯で一六万石も獲れた。種田さんの漁場も大漁だという。鯨製品も値下がりしているようである。商人も買い控えている。これから相場はどうなるのか。

▼五月一五日

祝聖会例会、起床三時四十分、早薄明かりになつた、夜明けが早くなつた。四時頃行つたら三人が来ていた。いま農園はアサツキの最盛期で、二、三〇人の人が来て採っている。

▼五月一七日

漁場では胴鯨、身欠の荷造りをしている。これらの積取り船が二隻入港して荷役をしている。

▼五月二〇日

呉服屋の出張販売が四軒も来ている。古平では今日から売り出しの旗を立てている。鯨大漁とのことで薬屋、保険屋、その他大勢

が来ている。旗もたくさん立つてお祭りのような賑わいだ。八千代生命の社員が来て、代理店になつてくれと言う。今はとてもできないが、明朝までに相談して返事をすることにした。

▼五月二二日

今日、初めて自動車が新聞町通りから中央通り、港町へと走つて行く。サクラの枝を差し国旗を立てて走る様は勇ましい。子供たちは自動車 came というので大騒ぎをしている。昨日、余市から山道を通つて来て、今日野塚まで行つて日帰りすること。その後、古平を根拠地にして、町内や美国方面へ走り、近日中に余市、積丹まで延長する計画だという。

▼五月二三日

祝聖会で観音滝まで行くことになつてしたが、店の方が忙しく見合わせた。自動車の披露で、無料で泥の木まで行つたとのこと。①公園へも走り、町内を走るの皆珍しがって見ている。やぶ長前では、安木節や秋田音頭など歌や踊りの連中が来て、それを大勢の人が見ている。大漁気分が町中が浮き立つている。

▼五月二十四日

朝から夜まで①公園へ自動車
が往復していて町は賑やかだ。浜
に出て見ると上ナギ、汽船が二隻
入港していて煉製品の荷役をして
いる。九時頃、消防組の非常呼集
の半鐘が鳴る。

▼五月二十五日

古平消防組の演習日、新開町で
放水試験がある。後①公園で
慰安会があるというので自動車
が忙しく往復している。

▼五月二十六日

吉井の川崎船が昨夜イワシ網の
初出漁をしたがどうだったろう。
浜へ行って見たが一面の霧であつた。
二九、三〇日、大阪相撲があると
いうので、②の干場で小屋掛け
している。鯨が大漁だといふので
ずいぶん賑やかだ。

▼五月二十七日

今日も汽船が三隻入港して荷
役をしている。イワシ網を始める
人が多くなり、網やロープがかな
り売れた。午後③主人に誘わ
れて数人で④の公園へ行く。公
園では桜が咲いていて、暑からず
寒からずの良い気候だ。向こうの
方では警察と役場合同の観桜会

を盛大にやっている。六時頃、①
公園、支店農園へ寄つて帰る。

▼五月二十八日

勇丸で大阪相撲一行が来て町
中賑やかになった。三時頃、余市
中学校の生徒二〇〇名ほどが山
道を歩いて古平まで来た。今夜は
種田干場にテントを張つて野営す
ること。夜、学生たちが町中
を見物して歩いていた。

▼五月二十九日

相撲小屋から太鼓の音がする。
一時頃入つて見る。土俵入りはな
かなか見事であつた。朝八時頃、
余市中学校の生徒は一泊して陸
路余市に帰つた。三時頃から雨が
降り出した。

▼五月三十一日

農園は桜の満開できれいだと
のこと。相撲は今日は六〇銭に値下
げしたがガラガラだという。人気
がない。イワシ漁、昨年は三〇日
夜から大漁だったが、今年はまだ
漁が無い。

▼六月一日

祝聖会例会、明るくなっているの
でビックリして飛び起き出かけた
が、行つてみると松岡君一人だけ。
後から武川、西村、竹浪君らが来

る。境内の桜も満開である。

▼六月三日

今日は徴兵検査が学校である
というので学校は休み。昨夜、イ
ワシ漁が出漁したが五〇〇六〇
尾とか、まだ時期が早いのかもし
れない。

▼六月四日

イワシ漁、石油箱に五〜一〇杯
くらい獲れたという。時期なので
浜も幾分元気づいてきた。今夜、
余市から古英丸で東京相撲一行
が②の浜に上陸する。大勢の人
が見物に來ている。

▼六月五日

櫓太鼓の音が聞こえる。二〇年
ほど前に常陸山、梅ヶ谷らの東京
相撲が来て以来の久しぶりのこと
で、大した人気である。八時頃
には木戸口に客が來ている。九時半
頃行つたが八分の入りで、桟敷席
は満員だ。取り組みは午後一時
から始まり、幕内の人気力士が
次々に出る。四時頃終つたが熱の
入つたよい相撲であつた。今日の相
撲は大当たりだ。夜八時頃、相撲
の一行は②の浜から増毛行き
の汽船に乗り込んで出帆した。

▼六月六日

風も静かになり快晴、暑さは暑
中のような。八日に衛生検査があ
るので、今日の天気を幸い大掃除
をする。畳を全部出し商品を片
付ける。なかなか大変だったが日
が長いので、全部終つたのは七時
頃であつた。夜、浜へ出て見るとイ
ワシ船の明かりがたくさん見え
る。

▼六月七日

イワシ漁は一向によくない、二、
三箱くらいという。去年の今頃は
ずいぶん大漁だったが、漁師も悲
観している。夜、学校で郵便局主
催の活動写真があるというので子
供らが行く。

▼六月八日

久しぶりで農園へ行つたがリンゴ
の花が真つ盛りで、この分だと今
年は上作だろう。三時頃、新開町
の「七借家」でボヤ騒ぎがあつたが
大事にいたらなかった。消防も出
て一時は大騒ぎになったがまずは
よかった。昨日、小樽砂留町で大
火、百戸余り焼失した。美幌町で
も大火、八〇戸余りが焼失、火
事は恐ろしい。夜、部落会の集り
が③支店である。

▼六月一〇日

イワシ漁も三玉から五玉ぐらい獲れたという、粕を炊くほどどうやらとれたので、これからの大漁が期待される。旧五日になったので裏に鯉のぼりを揚げたが、子供らは大喜びだ。日照りが続いて農園の花に水をやる。

▼六月二日

イワシ漁はどうも思わしくない。吉井、㊦は上の部で六、七玉あったという。夜、浜町の劇場の問題でビヤホールに集り協議する。改築には七千円以上かかるという。

▼六月二日

昨夜からの雨が朝になって止んだ。農作物には実によい雨であったが、気温は五五度F(約一三度C)手が冷たいほどだ。新聞によれば泊小学校と歌志内小学校が火事になったという。このところ各地で火事が続いている。

▼六月三日

五時頃火花が上がリ、今日は学校の運動会だ。小雨が降り出して寒く、八時頃になり中止、明日に延期だという。一時から丸山観音のことで相談があるというので、禅源寺へ行く。四時頃帰ったが、

まだ霧雨が降っている。今日は町会で役場新築の件が決まったという。

▼六月四日

運動会の火花が上がる。雨の後なのでほりも立たず、曇天だが寒くもなく、おあつらい向きの運動会だ。美国から生徒が大勢見物に來ている。

▼六月五日

祝聖会例会、四時起床、寺へ行つたら一番だった。北浜、竹浪君が來て今日は三人だった。札幌神社祭で学校は休みだ。

▼六月三日

今日もイワシ漁は皆無で、これではタラ縄の餌も無いという。今夜は出漁を見合わせるところもあるという。五月頃は出漁を期待していたのに、この不漁では漁師も張り合いがないだろう。網の貸し売りが多いので、これでは商売にも響いてくる。夕方、入船町へから大謀用の品を注文したいとのことで出かける。アバ縄、大綱、ミゴ縄などの注文を受けて来る。

▼六月二五日

小樽から早朝の汽車で余市へ着く。余市で所用を足し、九時半出

港の外浜丸に乗る。一一時古平に着く。今日から人夫五人を頼んでナシの袋掛けと、リンゴの袋掛けをする。イワシ漁も二、六玉くらいしか漁がなく、いよいよ見切り時だというので、網など片付け解散するところもあるようだ。イワシ不漁で町内は大打撃だ。農園へ行つたら、三、四日見ないうちにリンゴがずいぶん大きくなつた。豊作は間違いないだろう。

▼六月二日

先日来の雨で古平川が増水し、土場では積んでおいた薪を大分流されたという。

▼六月三日

イワシ漁が不漁だったので、月末の掛けも二割くらいしか入金がない。去年並みだと四、〇〇〇石は獲れ、一〇万円ぐらいの水揚げがあるのに実に困つたことだ。町にとつても大損失だ。

▼七月一日

祝聖会例会、和尚の部屋から縁側の戸を開け、池から中庭の方を眺めたが、植木や花の眺めが良い。祝聖会の花壇も、これからいろいろの花が増えきれいになるだろう。

う。

▼七月二日

イワシ漁は不漁でこのままではさびしい限りだ。畑方面ではリンゴの袋掛けが始まり、五時半頃から出面の人が通る。今日の新聞では、岩宇方面イワシ大漁と出ている。

▼七月四日

リンゴが一〇年来の大豊作というので袋の注文が多い。出面が足りなくて困る。何とかお祭り前には袋掛けを終わりたい。青森もまたリンゴが大豊作だという。これだと秋はリンゴが安くなるだろう。

▼七月五日

今日は青年団運動会の日で、六時頃火花が揚がる。子供らは見に行つたが、この忙しさでは運動会どころではない。一〇時頃一度大雨が降り、午後三時頃また降つた。運動会もこの雨で中止になった。リンゴに虫がつかないうちに早く終えねばならぬ。

(続く)



ある初夏の一日

大澤 文子

水を打ったような静かなホームに、やや速度をおとした朝の列車が轟進してくる。忽ち起る爽やかな風に私は、短かめの髪をなぶらせる。ああーそんな時、心から快感を覚え仕事と称し、あちこちへ足をのびし走り

続けていたあの頃。「交通事故にはくれぐれも気をつけるようにネ」と、その頃よく運勢を観てくれる親切な歌友がいて言葉をかけてくれた。私は心から感謝し常に気をつけるようにしているのだが…。

年齢の重なるたびに思わぬ落とし穴にはまることもままある。仕方のないこととは思ふ日々ではあるが…。朝の鏡にうつるわが身にむかい「大丈夫よネ！」と声をかけ一瞬笑顔を見せる。きゅつと身体中に電波のようなあついものが流れ身のひきしまる思いがする。

のはじまりだ！ この晴れ空に向かい小庭をひと廻りしようと思ふ。そこそこ伸び立つ花群がそれぞれの香を放ちわれを迎えてくれる。

「いいなア」、だが私は『方向音痴』古平に居を定めていた時、「行つて見たいなア」と思う所でさえ、ひとりではむづかしい。第一あの積丹岳のふもと、高原いっばいに咲き盛る蝦夷萱草を一度でいいから見たい。そしてその花群の中に身をうずめてみたい、そんなセンチな思いにかられることもしばしばだった。

それに恩師である海鳴主宰、故北見恂吉先生が一堂にこもられ、執筆のお仕事をされたといわれる『小樽茶屋』の前に立つて見たい、そんな思いにかられひとり悶々として、ただ独り短歌の勉強に心を向けていた

あの頃だった。そんなことを思っていたある日…。ふと海沿いのわが家の前方で車の軋む音がした。窓越しにのぞいて見た。と、思いがけなく歌友の友子さんだった。「ネ、初夏の蝦夷萱草を見に行かない？ 今が見ごろよー」友子さんの甘い声、突然の誘いだつたが、早々に

「車の人」となるのに時間はかからなかった。珍しく初めて眺める積丹道路の風景に見とれていると、「身をのりだしてダメヨ！」友子さんのひと声。注意をうけながら車は、はや美国町を過ぎ婦美、野塚の中を走る。広々とした高原いっばいに乱れ咲くオレンジ色の蝦夷萱草、車からおりこの草原を歩いてみたい。沢おぐるま、姫女苑の花群の中に身をうずめてみたい、そんな思いにかられたのも一瞬！友子さん運転手まかせの車は余別町で止まった。

「あらっ珍しい！」歌友の金杉すみさんが驚いて笑顔で迎えて下さった。予定していなかった事だったのであわてて車からおりた私だった。遠慮もなく、こちんまりした

金杉さんのお店の中を通り、奥のひと間に案内された。思いがけないことだったので夢のような感じをうけた。金杉さんはこのような遠い地から、毎月休むことなく古平町岬短歌会に出席され、岬短歌会の一員として北見恂吉先生の指導を受けられ、よい短歌を詠まれていたのだ。金杉さんは快くにこやかに笑顔を見せながら、遠慮のない私たちのために早速おいしい素麺をごちそうして下さいました。サッサツと水の流れる音、おいしい味の香り…。やや短歌の話に時を過ごし、又の日を約し再び友子さんの車のひととなった。

蝦夷萱草の群れ咲く中を再び通り、車を走らせてくれた友子さん、後日を約し手を振って帰って行かれた友子さん！

私はいま札幌のわが家の書斎にこもり、今年も美しく咲きほこっているであろう蝦夷萱草を思い書き続けていたが、そつとペンを置いた…。そして「千の風になつて…」の楽譜を広げ過ぎし日の歌友『金杉すみさん』の名を呼び、静かに眼を閉じた…。

町内の学校探訪

新地小学校

◆危険校舎に認定

新地分校は明治二十二年三月創立以来しばしば校名が変わった。明治二十四年一〇月 浜中尋常

小学校新地分校

同 三六年九月 古平尋常高

等小学校新地分校

昭和一六年四月 古平国民学

校新地分校

同 一二年 古平小学校新地

分校

また、昭和二十四年四月一〇日に西部方面を焼き尽くした古平町大火があつたが、新地分校は幸い人家から離れた高台にあつたので類焼を免れ、罹災者の収容所になつたため児童は本校に通学し、同年一月二日になりようやく



く授業が正常に戻つたのである。新地分校の校舎も大正一二年の建築であり、しかも古平小学校の古材が多く使われていたので傷みが激しく、昭和二十九年に行われた道教委の公立学校危険校舎一覧でも「危険校舎」として認定。←老朽化し危険校舎に認定された新地分校の玄関

された。

第二次世界大戦中から、特に戦後の混乱期にはすでに老朽化した危険校舎が多かつたが、国や道そして各市町村も財政的に全く余裕が無く、その上、六・三制による新制中学校の設立に教育財政の多くを費やしていたのが現状であつた。

危険校舎として認定されたのは高校一八校、小学校は実に三二三校、中学校一六校にも及んだ。後志管内は小学校一校・中学校一校であつた。

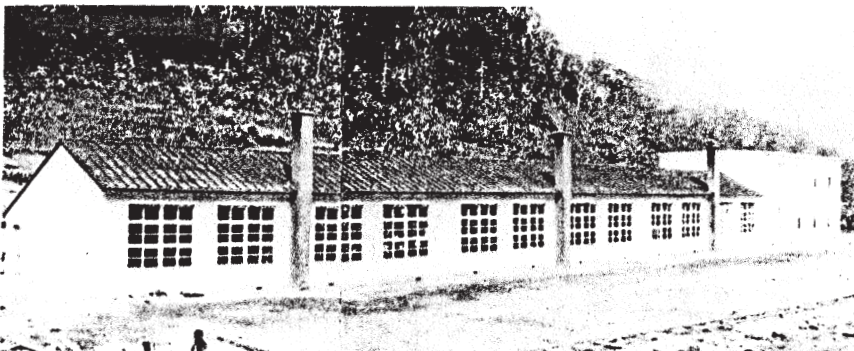
◆新校舎の落成

以前から新地分校は、老朽と破損状況から児童の教育活動にも危険だとされ、補修などを行つていたが、新築は急を要する問題として、昭和二十九年八月、町議会に新地分校敷地専門委員会が設置された。

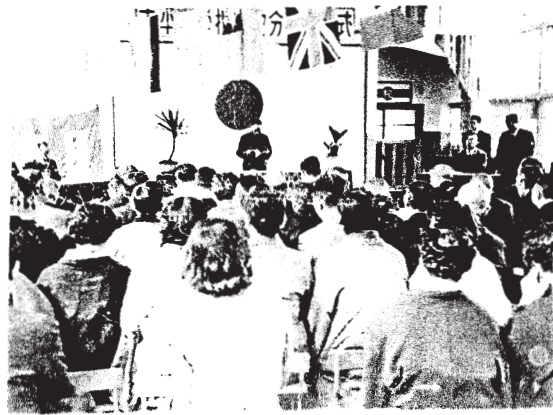
一方では危険校舎の取り扱ひを受けたことから、在籍する児童二四三名は新学期早々の五月から本校に収容されることになつた。1明けて昭和三〇年五月から校舎の解体工事が始まり、同年九

月新築工事に当たつて、町広報は「新築に向けては町民挙げてこの完成に異常な努力と熱意をはらつた」と、当時の町民の関心の高さを報じている。

← 緑に映える白亜の新校舎



← 地域の人たちが待ち望んだ喜
びの落成式



← 伊藤由松町長の式辞

古平小学校 新地分校
落成式

式 辞

式 辞

町立古平小学校新地分校の工成
り、本日さうやかながら落成式
と奉ぐらうにあり 先づ本校建

昭和三十一年一月三十一日

古平町長 伊藤由松

昭和三十一年九月一〇日着工、
翌昭和三十一年一月二〇日に完
成し、校舎坪数二四六・六五坪、
総工費一三、四八八、〇〇〇円、
(校舎建築費一、九四七、〇〇〇
円、付帯工事費一、五四一、〇〇
〇円)

特殊ブロック鉄筋コンクリート造
り二階建ての耐寒、耐火の堂々た
る新校舎の落成式が行われた。

落成式では工事請負者である福
津兼松、学校備品を寄贈された

吉野金治、堀藤次郎、仲谷昇三、
長谷川善作、村上豊海、福津兼
松、新生婦人会、新地町内会の個
人六人と二団体に感謝状が贈ら
れた。

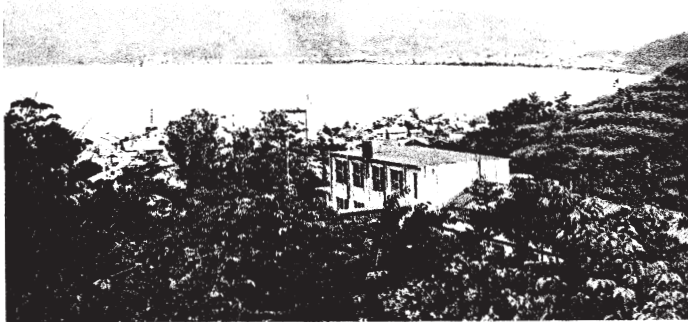
伊藤由松町長の式辞、山口忠治
教育委員長の挨拶、大浦幸一郎小学校
会長の祝辞、大浦幸一郎小学校
長の謝辞などがあり、児童代表
として三年生斉藤和子のお礼の
言葉があつたが、その言葉に参列
者一同大いに感動したと記録に

ある。

丘の上に建つ近代的な校舎に児
童や父母、そして地域の人たちの
喜びもひとしおのものがあつて、児
童が祝典歌を斉唱して落成式は
盛大のうちに終つた。

祝典歌は本校広谷成男教諭の
作詞・同じく酒井敬助教諭の作曲
によるものである。

← 校舎裏の高台から遥かに古平
湾と対岸を望む



落成祝典歌

一、海に望んだ 丸山の

ふもとの おかの 新校舎

希望に 胸も ふくらんで

息はずませて 通う道

ああ うれしいな

僕らの学校 僕らの学校

(二番 省略)

当時の学級編成と児童数

学級 男子 女子 計

一年四組 一一 一二 二三

一年五組 一二 二〇 三二

二年四組 二〇 一七 三七

二年五組 二一 一七 三八

三年四組 一四 一七 三一

三年五組 一五 一七 三二

九三一〇九二〇二

分校主任 教諭 瀬川直彦

校下の父母の職業は次のよう
あり、地域的にも漁業が主体で

ある。(昭和三十五年五月一日現在)

漁業 一三一人(六四%)

鉱業 五人(三%) 建設 九

(四%) 製造 八人(四%) 商業

一六人(七%) 運輸・通信 五人

(三%) 自由労務 九人(四%)

サービス一人(二%) 公務員 一

一人(五%) その他一〇人

(五%) 計二〇六人へ続く

古平と私

十、ぼくの故郷はどこだ

葛 西 庸 三

今年四十歳になる息子が中学生の時、

「ぼくの故郷はどこかな。」

と言った。私は咄嗟に返事ができなかった。そして、息子の心中を推しはかかった。

無理もないな、と思う。考えてみれば、息子は京極に生まれて三歳まで育ち、そのあとは俱知安(二年)黒松内(一年)——また京極(四年)——そして古平(二年)

——余市(三年)——小樽(二年)——札幌予備校(一年)その後旭川で大学四年を過ごし、後志に就職した。

振り返れば、高校卒業までの十八年間に八回転居している。一年に一回住所が替わっているのである。

私は少し間をおいてから、
「そうだな。お前の故郷は『後志』

だよ。」と言った。

「そうかな。普通は『故郷』と言えば、自分の生まれたところを言うんじゃないの。」

「いや、そうとも限らんよ。」

私は言葉が続いた。

「一般的には、『故郷』と言えば自分が生まれた土地のことを言うんだけど、同時にかつて住んだことのある土地や、なじみの深い土地のことにも『故郷』って言うんだよ。」

「そうか。そうゆうふうにかえれば、ぼくには『故郷』がいくつかある訳だ。」

「そうだよ。黒松内の一年間で泳ぎを覚えたり、補助輪をはずして自転車に乗れるようになった。南京極の時は四年生で全町卓球大会で優勝したり、古平では生まれてはじめて御輿をかつぎ、少年野球で活躍

できたも。余市では金道の陸上大会に毎年出ることができたじゃないか。そう考えれば、思い出の土地がいっぱいある。『後志』がお前の『故郷』にふさわしいと思うよ。」

息子は納得した顔になった。

「そうゆう私も、生まれてから今まで、随分あちこちを転々とした。」

旧前田村(現共和町)の農家の四男として生まれ、その後、鷺別(現登別市)——狩太——札幌——真狩——狩太——俱知安——京極——俱知安——黒松内——京極——古平——島牧——寿都——余市——と歩き、やつと平成十一年十月、石狩市花川の終の栖に落ち着いた。

だから逆に息子から、親父の故郷はどこだ、と聞かれたら、やはり俺の故郷は『後志』だ、と答えることになると思う。

つまり、古平で生活した思い出深い三年を含め、私にとつてはかつて住んだことのある土地は、なじみ深い、思い出の土地であるからだ。

そして、その土地その土地には、それぞれの歴史と伝統と文化があった。

特に鮮烈なのは、昔、鯀漁で栄えた漁師街の歴史と文化、そこに住む

人達の個性と気質であった。そのことを私は、古平と寿都と島牧、そして余市の浜町に共通項として感じるのである。

日本海の荒波の中で、時に命を賭して大漁に挑み、一攫千金の時は、札幌を抱えて札幌の繁華街に走る。漁師の街、独特の風景である。祭りも古平と寿都、そして岩内には他の町村にはない度肝を抜く勢いと華やかさがある。多分、美国もそうだと思う。

このことは、鯀漁で栄えた中で生まれた文化が、今でも確実に引き継がれていることを証明しているのだと思う。

だから私は、退職したら毎日海が見える高台に家を

建てて住みたいと願った。ひととき、余市のモイレ団地の土地も探したが、妻の意向に合わず断念した。

結局、周囲が家だけびっしり並ぶ花川の地に住むはめになったのだが、私の脳裏には、後志の沿岸の白い波が、険のおどろき、岩をくたく波の音が耳の中で生きている。



神話のふるさと

日向で稲倉石会

富山市 高橋藤蔵
(元・稲倉石鉱業所勤務)



去る四月十二・三日の両日、神話のふるさとである宮崎県の日向で、本州地区稲倉石会を開きました。

日向には、昭和四十年代に稲倉石鉱山で掘り出したマンガン鉱石を主原料として、電池を製造していた工場があり、また稲倉石鉱山の社員が長駆転勤し、定年後は日向に定住している会員があり、遠地ではありませんが、開催地として白羽の矢が立てられました。

幹事を引き受けた地元会員は、せっかく九州まで来て下さるのだから、心に残る集いにしようとの数か月前から準備を整え、費用は安く・思い出はデング盛りにと、いろいろとご苦労

をなされ、その甲斐あって会員と招待者を合わせて二十六名が参加されました。

宮崎県は今『そのまんま東』知事の誕生で、全国的に衆目を集めており、到着した宮崎空港をはじめ、各地・各所で新知事のパネルが目に入りました。

第一日目の四月十二日は、紺碧の空・広い緑の芝生に、キーンという快音をなびかせてのゴルフを楽しみました。

スコアを競わずに、ナイスショットで拍手、ミスショットでも拍手という和気藹々のプレーで、九州高原の美しい大気を満喫し、快い汗を流しました。ゴルフの後には工場見学をさせてもらいましたが、ここでの新

発見は、稲倉石で掘り出した色彩・形容・重量感ともに抜群のバラ色の鉱石が、色あせることなく、事務所の入口にデンと飾られており、四十年ぶりに再会出来たことでした。

夜は、ホテルでの大宴会となり、会員の中には昭和四十五年の鉱山の売山以来の再会者もあり、飲む・語る・笑うの渦の中で心ゆくまで旧友を温め、お開きの後も、伝統の二次会が深夜まで続きました。

●天の岩戸



翌十二日は、バスを借り切ったの高千穂周辺を一周し、天の岩戸・高千穂の峰々・神武天皇

船出の地など日本の究極のふるさとに接し、有意義な観光となりました。

今回特に嬉しかったのは、日向工場長さんをはじめ、地元関係者とは初見の方が殆どだったのですが、まるで旧知の友を迎えるような、至れり尽くせりのおもてなしを頂いた事でした。

後日、日向工場長さんにお礼の手紙を差し上げましたところ「同じ釜の飯を食べた仲間が、各地からはるばる集い、旧交を温めているのを拝見し、大変うらやましく感じました。

稲倉石会が、末永く続きます事を願っております」との、ありがたいお手紙を頂きました。

これも、稲倉石のマンガン鉱石が四十年の時空を越えて、両者を結んでくれた固い絆だったと思います。

会員の中には、稲倉石鉱山での勤務が僅か一・二年という方もありますが、鉱山で過ごした同僚愛・隣人愛は、まさに私達の宝であり、これからも綿々と続く事になるでしょう。

ぼんちの

樺太漁場体験記

吉野 慶一郎

漁業局長の責任ある地位を悪用して、ニシン漁場の経営者の私を温情を装い漁期限前に引き揚げさせる手段は、ラジオが狙いであることを自ら暴露したその愚かさには苦笑するばかり、彼もやはり二流以下のソ連人なのかと評価が下りました。

翌日役場へ行き、受付をして順番を待ちながら周囲を見ると顔見知りの人々が大勢集まり、引き揚げができる喜びを語り合い明るい場所でした。正面席の町長から引揚証明書を受け取り嬉々として帰っていくのでした。また代わりの人達が入って来る。ところがなかなか私が呼ばれないのでシビレを切らして立ち上がってよく見ると、後から来た人が私より先に町長から書類を受け取っているのに驚い

た。なお見ているとソ連人が付き添った人が優先されていることが分かったので、それならばと役場を出て事務局へ行き、順番無視の不满を局長に述べ応援を頼みました。

「それでは明朝、私が町長に話して一番先にやつてもらいます。安心して下さい」

と快諾してくれたのです。

翌朝、時間通りに役場に行く。と約束に違わず正面の町長席の隣に早くも局長がおり、町長と仲良く談笑しているのです。

私を見ると大きく手招きして呼んでくれました。前に行き兩人に挨拶すると、待っていました。とばかりに町長が笑顔で、

「永い間ご苦労でした。無事帰国して下さい」

と言って、帰国許可証(年月日

指定)が手渡されたのは今日の第一番目でした。町長に頭を下げて局長を見ると、『良かったネ』とウインクをおくってくれました。

昨日とは比較にならない好展開にわが身を抓ってみました。局長は町長にいったいどんな話をしたのか? ソ連では地位や立場による、上司に対する袖の下が公然と通用している習慣があると聞いているので、あるいは町長の今日の笑顔はそのせいかもしれない想像を飛躍してみました。ソ連という国は、思いも及ばぬいろいろな面を合わせ持つ謎の大国だという印象を深くしました。

局長といっしょに漁業事務所等に戻り今日の礼を述べた後、改めて許可証を見て驚いた。引き揚げ出発日時が『明日日真岡収容所に入所』と記入されていて、余りにも急なのに色を失い局長に見せると、

「少しでも早い方がよろしいだろうと、町長に特に頼んだのですヨ」

手柄話のようなこの言葉の裏に

は、早くラジオを手に入れたという思いにかられたからでしょう。

出発日時も決定された今は何うもかも終わつたのです。追放者の代名詞引揚者として、故国に帰ることを自分に納得させるのに時間はかかりません。こくなつては引き揚げ命令に従うほかありません。そこで局長に對し心とは裏腹に、お陰で帰国が決定し大変嬉しいと礼を述べた後、彼が待ちかねているラジオの件について、

「前にお話のあった私のラジオは、他の沢山の人からもぜひ欲しいとの申し込みがあります。が、漁業関係で大変お世話になった局長さんにお礼として差し上げることに決めました。私の代わりと思って仲良くして下さい。明日正午に受け取りに来てください」

と言うと局長は目を輝かし、漁業で仲良しになり、それが縁で私を選んでくれたことはとても嬉しいのです。吉野サンは本当にいい人です。アリガトウ、アリガトウを連発し、念願がかゝ

帰らざる亡娘の言ひし「今日は母の日よ背中ゆっくり流して上げる」

返らざる事思はじと人には言へど独りしあれば亡き娘をおもふ
 楽しげに笑ふを夢に見しけどもうつつは深く悲しみありらむ
 生きることかくも苦しきものならむ娘を失ひて見る夕映え
 亡き娘の声に目覚むれば窓に見る白夜のごとき月明りなり



瀧 内 優 子

遠き子を頼る思ひを裡に秘め目覚めゐて聞く山鳥の声
 香あげて娘の墓去るに鳩の鳴く別れ告ぐる娘の声かも
 娘の忌日過ぎたる後につつましく咲く水仙に心寄りゆく
 いとほしき亡娘の残せし腕時計わが感傷となりて螺子をまく
 いつも其処に娘の在る如く閉じて置く一冊の日記の曳く影重し

「なつた喜びで上機嫌な様子を眺めていると、自分に腹が立つばかりでした。」

引き揚げに当たつての後始末がいつぱい控えているので、帰宅の途中まず鯨番屋へ寄り、突然の帰国命令で急に引き揚げさせられる悔しさとお詫びをし、よろしくお願いすると報告しました。これには誰ひとり不平不満もなく逆に、「ご苦労さんでした。自分たちもすぐに帰れるのだから、心配しないで早く帰って下さい」と励まされ、涙が溢れました。

編集後記

「このころ新聞やテレビなどを見るとやたら謝罪やその広告が目につきますが、ここでもまたまた遅延のお詫びをする破目になりました。なんとか八月中には遅れを挽回したいと考えておりますので、継続しての「愛読」を願っております。残暑が予想される候、ご健勝でお過ごしください。」

先ごろの道新の記事に、『人食いザメ』として知られる南方系のホホ

次に漁業組合へ行き、ソ連から聞いた通り私の漁場の継続が決まっていたので、ご面倒でしょうがよろしく願ひします。

と話す、組合の幹部の方も一様に心配しないで無事帰って下さい。この際日本人が協力して最後まで頑張りますと、心強い覚悟を聞いて暗雲が消え去り明るい気分になりました。

家に戻ると、驚いたことに親類や近所の人達が大勢来ていて、家の周りや大きな荷物などを取り片づけているのです。

〈続く〉

ジロザメが、サハリン沿岸で初めて漁獲され、住民に衝撃を与えている。ホホジロザメは、後志管内古平町沖で捕獲されたのが従来の北限記録だが、温暖化による海水温度の上昇でさらに北上した可能性が指摘されている」とあり、「全長四・七メートル、重さは推定一トンの巨体」ということでした。「古平町で漁獲された」とありますから、その当時から、所蔵している記録の中にはありません。

悠

雜詠 〔六月号〕

主宰 水見壽男

燈台の岬に余寒を置き去りに

越野清治

峽深くあり残雪とけもの道

風渴き海渴きある二月かな

春寒し輕快に飛ぶ雲のあり

母の忌の数珠すり合はす寒の入

山口悦子

山裾に一条立てる野火ならむ

薄氷に午前十時の日が光る

冴返る古今東西冴かへる

冴返る天地あまねく閉ざさるる

越野敏雄

草青む一系の陣動かさる

海苔を搔くほどよき波の来るかな

猫柳白き蕾に彩られ

潮風の今日の立春告げてをり

高橋重子

雪解風木々鳴り止まぬ夜明けかな

風の笛夜をゆさぶる余寒かな

立春は名のみ北国けさの荒れ

ふるさとは墨絵のごとき牡丹雪

外山俊久

風の香と日和らぎて春動く

山の峰残雪ありて夕日澄む

風もなく部落総出の野焼かな

風ぐ海の上にいつとき春の雲

堀典子

海風の駆け込んで来る春二月

風折れの樹皮一枚に芽吹くもの

玉風や荒磯に春の波しぶく

ひとつ得てひとつ失ふ春日和

本間寿昭

前浜は冴返りつつ漁盛る

船釣や岳の残雪眩しめり

海境を染める朝日や若布刈舟

春立ちて雲それぞれの貌なせり

渡辺嘉之

不意に来て去り難き風冴返る

春立つを急かせし風のつぎ次と

冴返る風に段差のある日和

早春の硬き風音湾駆くる

室谷弘子

寒明の肌を刺し来る風硬し

春潮や後継ぎの無き網手繰る



【三三】
— 六月号 —

吉平俳句会

春光を咬み砕きゐる磯の波 越野清治
沖に湧き岬に砕け木の芽風
雪解水石狩湾へ突きささり 斉藤波留
町つなぐ古平大橋風光る
満開の桜散らして風の道 山口悦子
沢わさび知られてならぬ道のあり
切岸のブルーの海や巢立鳥 越野敏雄
煙突に落ちて小雀煤くけり
会場を黄に染め上げし花ミモザ 大和田絵伊
春めきて漁思ひ出す独言

星屑を見上げつゝ行く春の暮 高橋重子
今を詠む老いのたのしみ初桜
通学路踏みしめ作る今日の雪 外山俊久
川岸の流れの中に春のあり
夕雲の蛇行してゐる春の色 堀典子
囀りなき空移りゆく春の雲
禅寺の五百羅漢や若緑 本間寿昭
団塊の世代の肩を春の風
ひよつとして岬に謳ふは春の風 渡辺嘉之
春灯を消して始まる風の夜
春光に溺れてをりし岬の波 室谷弘子
海原を制し切れざる岬の波
春眠や声の目覚めはまだ浅し 仲谷比呂古
一雨に触れて牡丹の解れけり

短歌

吉平町岬短歌会

わが少女の記念旅行の葉書手に南国の無事ねがふしきりに

池田 テル

春彼岸仏様にと頂きしつくしの絵柄の可愛ゆきお菓子

金子 寿子

せせらぎのひびく土手みち路のとう風は流れて摘み草匂ふ

坂本 信子

除雪車の積みし雪の山は恰好のゲレンデとなり幼らの寄る

鈴木 時子

名残り雪冬のコートに手をかけてさてどうしよう今日の
外出

田中 香苗

湾いっぱいに鷗むれ飛ぶけさの海鯨は来たかと電話の間
いあり

丹後 初江

鉢上し紫色のサファニヤは窓辺に一輪愛らしく咲く

寺田 カツ子

よく晴れて歩を伸ばし来し三角橋雪解水のたぎつ音聞く

東 美知

雪解水流るる木立の湿地には水の精かも水芭蕉さく

堀 典子

俳句

吉平俳句会

雄冬岬沖の朧や波おぼろ

越野 清治

強東風の荒るる積丹日本海

斉藤 波留

枝貰ひ壺に咲かせて初桜

山口 悦子

紋白蝶はでな衣で舞ひにけり

越野 敏雄

涅槃西風をさまり次第出船なる

大和田 絵伊

舫い船うねりに映す春の月

高橋 重子

雪国の訛に和む爛の酒

外山 俊久

白波の観音岩に風光る

堀 典子

春船濶荷揚げあるたび鳶の笛

本間 寿昭

海原を風が捲りて四月来る

渡辺 嘉之

句敵の時に恋しき春の宵

室谷 弘子

海原に露天風呂置く島の春

仲谷 比呂古

古平町史年表

昭和32年 (1957)

2/6: 寒修行などで得た浄財で禅源寺鐘楼に梵鐘が寄贈され、住職岳轉和尚が『平和の鐘』と命名し撞初式が行われる

同: 古平町出身の洋画家で二科展無鑑査会員の伊賀勇高が、禅源寺に油絵の大作『裏町人生』を寄贈する。(現在ふるびら温泉・一望館に展示)

2/7: 浜町で4歳の女兒が自宅前の下水溝に落ちて死亡する

2/16: 今年から鯨沖刺網漁が許可になり、古平漁協所属の大型船3隻に許可が下りる

2/-: 近年のスケソ漁で漁船の遭難が相次いだため、スケソ漁組合では集団での出港と帰港を申し合わせる

3/7: 古平町が『新農山漁村建設総合対策計画町村』に指定されたのを受けて、古平地域農山漁村振興協議会が結成され委員が委嘱される

3/31: 鯨建網が10か統ほど建てられたが建網は漁獲皆無、刺網で1500貫ほどの漁獲がある(北海道庁の漁獲統計ではゼロ)

4/18: 稚内を根拠地にしていた鯨沖刺網漁船栄勝丸が枝幸沖で遭難し、乗組員全員が死亡する

4/27: 井田馬車屋主人が美国から帰る途中、群来村で馬車と共に崖から落ちて死亡する

5/9: 古平漁港管理条例が制定される

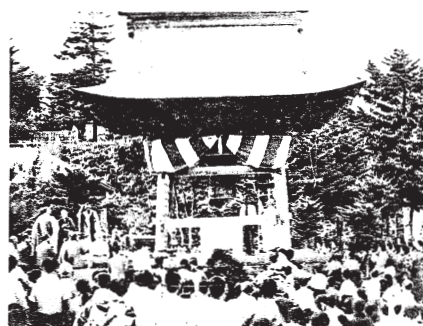
6/24: 中央バスが稲倉石まで1日4往復の定期運行を行う

6/27: 余市・古平・美国間定期航路の代船として一時金盛丸が就航する

6/29: 港町で郵便局員笹渕文吉がトラックにひかれ重傷、1か月ほど後に死亡する

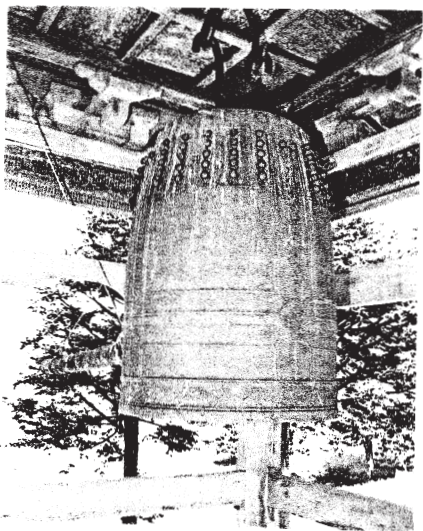
7/25: 道路法の改正により神恵内・入舸・古平線の国道が道道998号線に、建設中の余市・古平・積丹線が国道229号線に認定される

7/30: 火葬場及び待合室を全面的に改修する



↑ 鐘楼前で行われた撞初式に集まった人々

↓ 梵鐘『平和の鐘』



▲31年10月20日
日本の南極観測が始まり、南極地域予備観測隊の永田武隊長以下54名が、観測船宗谷で乗組員77名と共に東京晴海棧橋から出発する。

▲32年1月29日
観測隊が西オングル島北部に上陸し、観測基地を『昭和基地』と命名する。